

AIR を評価すれば活用の可能性は広がる

菅野幸子（国際交流基金コミュニケーションセンター プログラム・コーディネーター）

私からは、すこし駆け足のプレゼンテーションになるかもしれません。

先ほど小吹さんが報告したアンケートの結果は、アーティストの貴重な声だと思います。じつは、国際交流基金コミュニケーションセンターでは AIR をしている日本各地の団体とプログラムの情報を、日本語と英語のバイリンガルで定期的に更新して、提供しています。ただ、小吹さんが指摘されたように、その検索機能にはまだ課題があることは否めないと思います。

そのような課題はありますが、そもそも AIR とはどういう仕組みや目的かを考えないと、評価できません。AIR とはなにか。釈迦に説法ですが、「多様な分野で異なる文化背景のなかで創作活動を行なう滞在型創作活動」です〈資料 1〉。

先ほどメルリオ館長が紹介されたヴィラ九条山は、「東洋のヴィラ・メディチ」とよばれています。ヴィラ・メディチとは、メディチ家の別荘だった施設で、当時フランスよりも文化が進んでいたイタリアにフランスの若手アーティストを送り、最新技術や経験、インスピレーション、情報を習得することが目的でした〈資料 2〉。

AIR の本来の目的は、対話と共同作業の場であり、若手アーティストの育成ですから、未来への投資でもあります。芸術と社会とをつなぐ場、世界と地域とをつなぐ場、多様な可能性が生まれる場、それに実験の場であるべきであると、ミヒヤエル・ヘルターさんという元キュンストラーハウス・ベタニエン館長は指摘しています〈資料 3〉。

その目的は、創造の過程（プロセス）を体験、共有すること〈資料 4〉。これはアーティストどうし、市民とのあいだでもいえることです。もう一つは、かならずしも成果を求めないこと。この二つが AIR の評価になり、ひいては評価のむずかしさの要因ともなっています。美術館や文化センター、トリエンナーレなどの国際展では、客観的な入場者数などが評価指標の一つです。ところが、人がくることを拒んでいる AIR もあれば、成果が出ないこともあります。そういう AIR をどう評価するのかです。

日本は、自治体あるいは文化振興財団などが出資・運営している AIR が多い状況です。とくに最近では、地域活性、地域振興、空き家対策、文化観光、アーティストの移住などを目的に実施されることが多くみられます。また、住民の税金を出資していますから、住民への成果還元が求められます〈資料 5〉。つまり、そのような目的から、本来あるべき AIR の姿とはやや異なる事態が往々に生まれるという、ねじれ現象がみられます。

AIR の意義を図に表すと〈資料 6〉のようなかたちになります。

そのうえで評価について考えると、評価とは端的に言えばその事業をよりよくするためのプロセスであり、改善のための評価だといえます。

日本の自治体でも PDCA サイクルが導入され、評価が行なわれるようになりました。このチェックがアセスメントや評価にあたります。すると、その次は改善です〈資料 7〉。

ですから、AIR の評価は、プロジェクトの改善・発展のため、今後の活動のヒントを得るため、説明責任を果たすためなどに必要になるのです〈資料 8〉。

評価の手法は、いわゆる定量評価や定性評価など、一般的に行なわれている評価法基準につながると思います。評価は出資者へのフィードバックでもあります。〈資料 9・10〉。

とくに AIR をふくむ文化事業、文化芸術の評価に関して、これからもっと考えられるべきは、いわゆるエピソード評価とピア・レビューの二つだと思います。〈資料 11〉エピソード評価というのは、さまざまなアーティストが体験した逸話をまとめ、それを定性評価として拾い出して文章化する手法です。

ピア・レビューは同輩評価のことで、同じ専門家どうしが評価しあいます。自己評価や第三者評価、評価する人・される人などいろいろですが、立場や職種が同じであればアドバイスもより機能します。知識情報、課題、スキルも共有できます。こういう利点から、よりの確な評価ができるように思います。評価に関しては、シンポジウムあるいはシリーズ的な議論をしないと、日本での文化事業の評価は発展しないと思います。

最後に、AIR の可能性について言及して終わります。

アーティストの AIR への関わり方、その多様性には、さまざまなかたちがあります。アーティストが学校に関わることで生まれることやものがあります。企業や経済と関わればクリエイティブな産業を生むなどの経済活動が期待できます。福祉、医療の場、アーティスト・イン・ホスピタルでは癒しの効果が生まれます。海外には罪を犯した人たちとアーティストがコラボレーションする例もあります。ミュージアム、大学というにはおよびません。さまざまな場での応用性が考えられます。さまざまなタイプのクリエイターが AIR をする可能性も広がってくるかと思います。〈資料 12・13〉

最後に一つご紹介したいのが、国際交流基金が最近行なったデザイナーズ・イン・レジデンス、DOOR to ASIA です。〈資料 14・15〉アジアのデザイナーと東日本大震災で被災された水産業や農業などのスモール・ビジネスをされている方とのマッチングです。スモール・インダストリーあるいはスモール・ビジネスをされている方たちは、デザインやコミュニケーション・デザインなどをする余裕のないことが往々です。そこで、アジアの若手のアーティストと東北のスモール・ビジネスの人たちが会うことによって、新たな可能性を互いに探しあう。こういうプログラムでした。

そのような新しいタイプの AIR を日本各地で行なうことは、日本の新しい可能性を第三者の目から探る試みになります。先ほど小松さんがおっしゃった「新しい目で日本を見る」という意見、あるいは「海外からやってきた人たちが新しい目で日本の文化を見る」。そういう視点が、豊かな文化の日本をますます活性化させることにつながるのではないかと期待しています。（了）

アーティスト・イン・レジデンスとは？ **AIR-J**

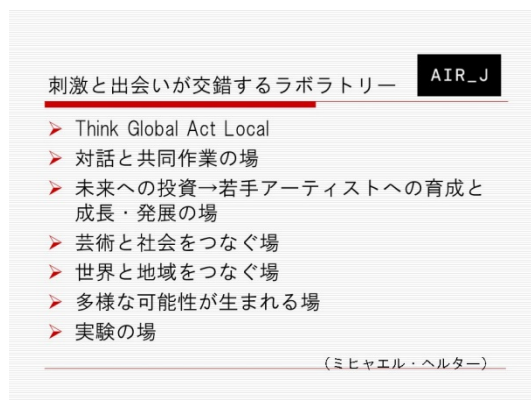
➤ 美術、音楽、舞台芸術、文学、映像などの多様な分野のアーティスト、デザイナー、演出家などのクリエイター、ジャーナリスト、アート・マネジャーなどが、国や地域を超えて移動し、異なる文化背景のもとで創作活動を行う

「滞在型創作活動」

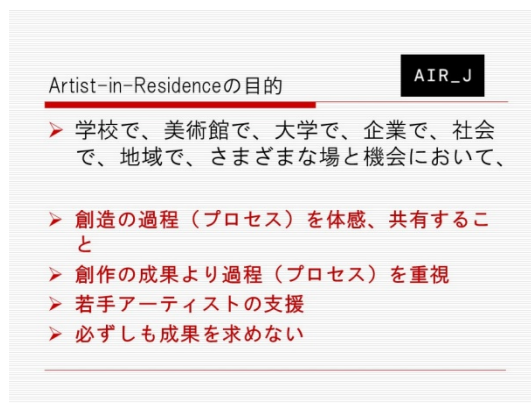
〈資料 1〉



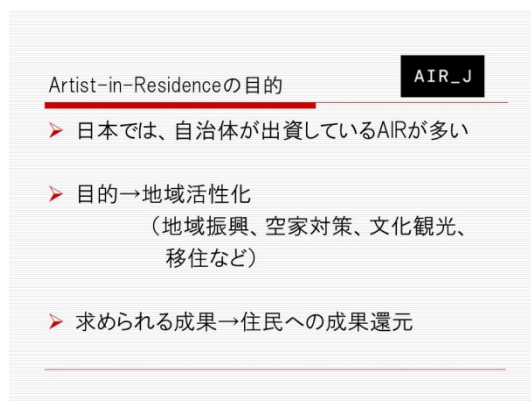
〈資料 2〉



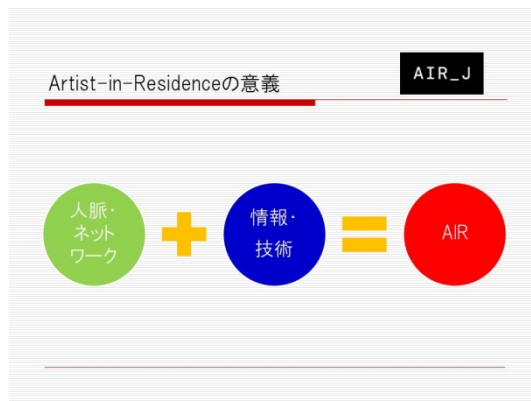
〈資料 3〉



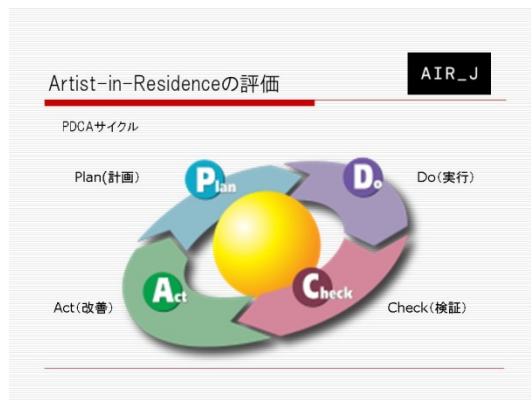
〈資料 4〉



〈資料 5〉



〈資料 6〉



〈資料 7〉

- Artist-in-Residenceの評価
- AIR_J
- なぜ必要か→
 - (1)プロジェクトの改善、発展のため。
 - (2)今後の活動のヒントを得るため
 - (3)説明責任を果たすため
 - (4)投資された資源(人・金・物・時間・情報)に対し、最大の効果が得られたかを確認するため
 - (5)設定された目標や政策課題に、プロジェクトをできる限り近づけるため
 - (6)社会のニーズ、時代の変化、経済情勢の変化、アートの変化に対応していくため
- (若林 朋子)

〈資料 8〉

- Artist-in-Residenceの評価
- AIR_J
- 誰が→評価者
 - 誰を→評価対象者
 - 何を→評価事業
 - どのように→評価手法
 - 定量評価、定数評価
 - 定性評価、エピソード評価

〈資料 9〉

Artist-in-Residenceの評価 AIR_J

➤ 評価は、出資者に対するフィードバック

↓

自治体
助成団体
企業
中央政府
寄付

※日本の場合は、多くの場合税金が投資金となるため、説明責任が求められる。

〈資料 10〉

Artist-in-Residenceの評価 AIR_J

➤ 定性評価→エピソード評価
数字では表現できない心に響いてくる言葉 や体験もある。それを定性評価としてうまく拾い出し、文章化。

➤ Peer Review(ピア・レビュー、同輩評価)
立場や職種が同じ(または近い)者同士の間で行う評価。知識、情報、課題、スキルなどもほぼ同等レベルなので、よりの確な評価が可能となる。

〈資料 11〉

Artistが関わること AIR_J

➤ Artist-in-School 教育との関わり
➤ Artist-in-Company 企業や経済との関わり
➤ Artist-in-Hospital 医療や福祉との関わり
➤ Artist-in-Prison 犯罪との関わり
➤ Artist-in-Museum 美術館との関わり
➤ Artist-in-University 大学との関わり

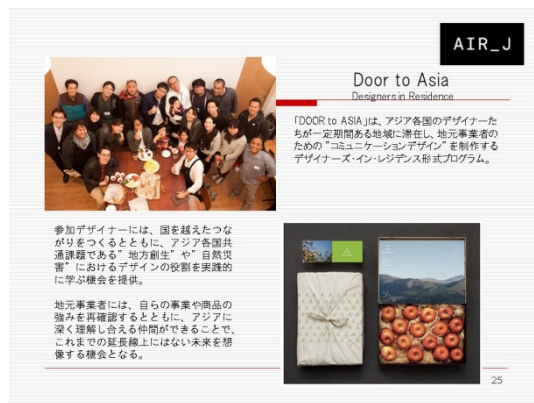
〈資料 12〉

滞在することによって (+in-Residence) AIR_J

➤ Writer-in-Residence
➤ Critic-in-Residence
➤ Composer-in-Residence
➤ Researcher-in-Residence
➤ Curator-in-Residence
➤ Designer-in-Residence
➤ Creator-in-Residence

〈資料 13〉

国際シンポジウム「関西アーティスト・イン・レジデンス in 信楽」
パネル・ディスカッション 3



〈資料 14〉



〈資料 15〉